

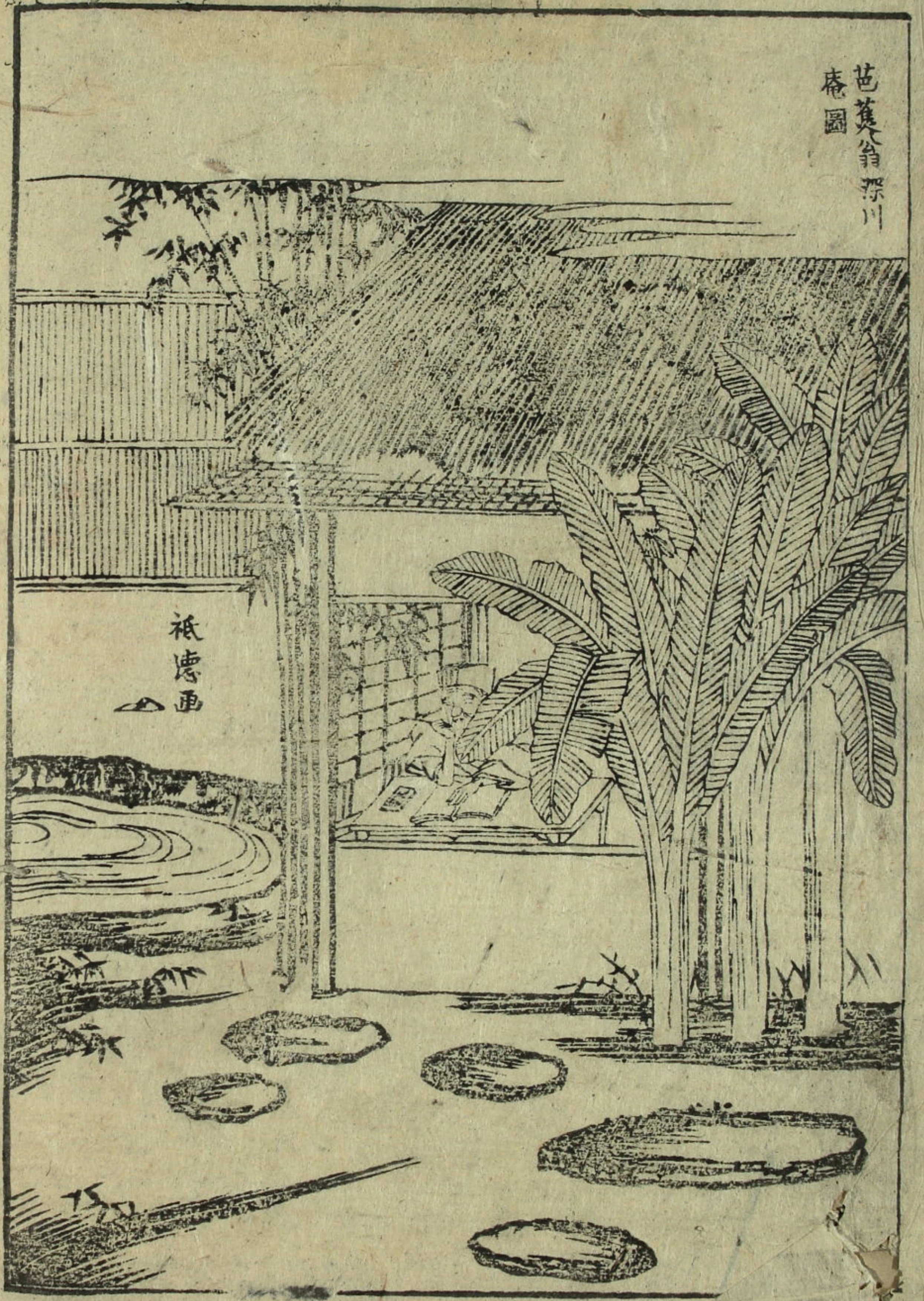


芭蕉文集 二合本



芭蕉文集
二合本
三
三





芭蕉文集序

伍渡郡澤振
旭窓庵松翹

芭蕉文集

松翹

芭蕉翁美滑枕者滑枕誓危言也從曼倩之後

肇立言於經世古今集采焉難於和歌

可稱創體然則曼倩所為更辭隱語而古

今集專取諸風雅皆覆心諫而射中於危

言耳證之言曰天道恢恢諫言微中是也

謂乎鳥之啞，鶴之喙，奚謂此談之意。
卮言解，願不窮，竭微辭，解紛琴乎假鄉音。
於天籟至，令泣鬼，感神則詠興，倭歌何分。
負德氏季，吟氏為唱，首建滑稽，誓之一家而。
芭蕉氏據二家，頗至其妙，或說巧於自然。
音致遠，巡奮山嶽，其聲餘而為文者，碎玉。

截錦大垂斯文，軌範後來好隱者，樹頰。
曠伊優亞相唱，天下滔，皆是也。芭蕉氏素。
家逆旅東漂，西泊逸，天壽所吟詠之鄉。
藻彼此散在，共其人朽，其未拾收，其遺文。
歲刺於文房，頌，同志傳曰：翁姓松名，親。
青歸柳，喬伊賀州，人性愛風雅，素。

與其角素堂之後相唱和為藻雅之
見敬重云

龍山 小林風德珠泐撰



芭蕉文集天之部

江都 小林風德編集

松島賦

地もくもぬちあはれと松島の枝葉才一は好風あ
して凡洞庭西湖とそち寸東南より海を入て江の
うらと里湖にちぬは行ぬ七十二増敷百は流る
歌つもの天は指しぬすもれを流ぬ南畝ふりぬ

屈曲のつゝためらふも其の氣也宵然とて
美人の顔は移らぬおののけのしゝらふまみれ
あやむいあや造代らうたうれの人の筆とあひ
詞とらふらん

月見賦

一 琵琶湖の月みんとてさうくおののけのしゝらふまみれ
て膳をねむらんことほほまじけの酒は推らん
いつは月と見れどもさうくおののけのしゝらふまみれ

一 懐かきとてさうくおののけのしゝらふまみれ
人との酒はさうくおののけのしゝらふまみれ
歌と酒はさうくおののけのしゝらふまみれ
詩と吟すまのうらさうくおののけのしゝらふまみれ
かむつらふまみれさうくおののけのしゝらふまみれ
惟然法師の酒はさうくおののけのしゝらふまみれ
さうくおののけのしゝらふまみれさうくおののけのしゝらふまみれ
あひ其ののなまらんとてさうくおののけのしゝらふまみれ

まはしてきてハ歌中ハ徳の好ひあしん徳やつひの
法師たよふらりてつくりぬる様ひかゝるを見ら
徒あやふまひひもたあひのきよはほ世の外れ用
ねとあやせり

弟くおし友と入る宵月夕客

かて之杯の真あまて湖水の舟も舟はほ入ひ
おぬ人乃風情とえらる杖に物草た座もあま
おけしも麻よ葉親乃若男あはれ赤登た舟の

こりていかにあまのちかははせおし出れ流のなあかひ
鏡り山もいかにあまのちかははせおし出れ流のなあかひ
つあわて比ららのこ根が智地がま川毎りりらま
る羽のまをたうく石山の峰の常味の嵐よとととく
おこよ楓橋乃雲も空あしん今夕橋乃ゆ帆のみ青
とくあすあ似らへり

夕月や湖水よりふせ山所

あはれと我朝の夢武部ハ石山あは海氏の好ひけせ

ういし度きりし後居共西湖ぬ越女の歌にたし
 いづれ風程ぬ名よおこし今世もわたりよほはしんや
 もよもも和漢の名を蹤あかりしはて松本ぬ舟とに
 よき茶店の欄干ぬととふては目いしよき世の
 水と海とてふふたは美若る露よるるあみ井る
 柿る酒も時あて松の口り鶴の入るあるや松も
 かふく月れぬ舟ぬ幸縁のきもはむわたりて
 古き都の名もゆりしは尾花川のぬふれとに

むね尚白と鴛一ぬれと松のやむ更よとぬ一

三井寺れ門たりのやりり一月

まことや推ぶらむしあし舟ぬ今宵のほひをさ
 生をぬ韓愈の文章をよむはしむい賞るあう待賦
 もとせぬへき詩人文客ぬさしけし神たにとく赤松れ
 前後ぬらむも其地ぬ人ばしけしやとみぬ舟を
 おもよとち入る宵る風ほとわらむわらむ月ぬあはれ
 山れぬの間り入ぬ

既望賦

月のお魚様もまはる宵のこころもあはれ
 舟と望月浦の其日はたゞのちとあつん
 何某成秀とよ人の家かゝる漕入て疎翁相客の
 舟あつてはしるも舟の中よりあつて
 何ぞの思ひのしるも舟の思ひては廉とまきあふ
 くらあつて其後園中草のわかしもあつて鯉餅れ
 切目たつぬあつて何ぞの思ひては上舟楫はあつて延と

のて各々の舟の言はは程は月は流るもあつて
 湖よとあつて思つてはあつて仲林をれ
 月のは見もあつては舟の境はあつて
 今宵あつて其あつては舟の徳堂上の様平に
 舟はとよ舟のあつては舟の舟は十二歳の
 舟はとよ舟のあつては舟の舟は十二歳の
 舟はとよ舟のあつては舟の舟は十二歳の
 舟はとよ舟のあつては舟の舟は十二歳の
 舟はとよ舟のあつては舟の舟は十二歳の

いりいりあつたつて其月大雲成とあるは福水商
玉増た影をひいて何いなる身佛に光を滅せ
いよよいのちの世の中よひく傾く月れまの
らとは東極黄門の歎息の詞を以て我の心僧
は雲よほひしめいひる僧の衣はるあわは
と常親おれ便おんがよひある一の身よあて
身は客はあひる身はとたんとおれなる上
栴はあひし月は栴河よかぬおて姑蘇城外の

鏡もよるあま

雪見賦

十月の時雨雪月の一と雪の雪はあまて福
法師の火爐のふ茶釜おたのふあまてあ金銀の
字もなる親に油のち背中まうせりあ版
あけは雪の影をたふあまてあ一あもあひるあ
あこのあまてあまてあまてああまてあま
あり上あ福あまてあまてあまてあまてあま

はりみくしと借むらうわ

東順傳

老人東順は橋氏にして其祖父江州豊田の農土竹氏と
稱す橋氏といふもの晋の母方あるも一と一と
七年甲子也秋八月に於て秋の上ゆふの夜なる
情なきは出づる思ひかまの座るやわきまを
も守終は更科の白ひかみくして大景め典の春も
老るる時醫はさひて恒のきくもいふ何某は

傳はし傳はくは金奥殿の愁もあはれと
古路をいひく名々の名をゆかたはく業は
既あふ十年たうめあり市店と山指あつて樂む
筆はとあり守れとけつぬのすもあけ其業は
車はありやうと一の上あもして東神ははる
是かあふ大徳朝市の人あり

入月のけふはれう四隅の地

東門辞 送詩六

去年の秋、ついでに、西に、何となく、一月初
途切れ、ついで、其のついで、一日、藤原
たいて、終日、果て、其の器、画は、好む、風雅に
も、予、試、よ、あ、何、の、あ、好む、も、風雅に
あ、好む、の、風雅、何、の、為、に、あ、好む、や、画、の、あ
も、あ、好む、の、風雅、何、の、為、に、あ、好む、や、画、の、あ
一、あ、好む、の、風雅、何、の、為、に、あ、好む、や、画、の、あ
用、一、あ、好む、の、風雅、何、の、為、に、あ、好む、や、画、の、あ

風雅、何、の、為、に、あ、好む、や、画、の、あ
入、筆、端、好、む、其、の、迷、を、あ、好む、や、画、の、あ
つ、い、予、り、風、雅、の、其、の、迷、を、あ、好む、や、画、の、あ
用、よ、り、あ、好む、の、風、雅、何、の、為、に、あ、好む、や、画、の、あ
あ、好む、の、風、雅、何、の、為、に、あ、好む、や、画、の、あ
あ、好む、の、風、雅、何、の、為、に、あ、好む、や、画、の、あ
あ、好む、の、風、雅、何、の、為、に、あ、好む、や、画、の、あ
あ、好む、の、風、雅、何、の、為、に、あ、好む、や、画、の、あ
あ、好む、の、風、雅、何、の、為、に、あ、好む、や、画、の、あ

たよきあつたあれ様故人の臨ごしめす故人のあ
たよりみれあつた南山大師の筆よしあつた
風静もまじはあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

納涼辞

西条丸の涼源とて夕月おはれはより有明と見え
川中ぬ涼とあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

法師お人ともは文と桶や紙活やれあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

川風やうすきあつたあつたあつたあつたあつた

芭蕉と梅寸辞

菊の赤謝とあつたあつたあつたあつたあつたあつた
紅白の是非とあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

唄よ梅子待色蕉一もみはる由風土色蕉の心や
 かあひらん粉梅れ茶とやあ(其心)きけるそて庭道
 とよあて茶の軒端もかふるらわあう人呼て茶蕉の
 石子四友の人ともいへて茶はうも根心つら
 祈くお贈るる茶くよあん成ぬ一とせみらおくも
 行脚思ひまて色蕉菴すてよ破ぬとまれと
 歌の藤の隣地かかへらなぬかへくもあはの
 おあひ風れうひあは海まへぬの心茶とてあは葉の

すまみあも書おー松ひまなぶあぬいああてあは
 猿孫の胸はにまうくぐのワれ色蕉るあうあは
 かいあぬまひいあは縁よあはせのち林とまてあは
 とせああ流とやうく今年五月らあんと花梅の白ひ
 とすあああああ人あはあも昔あはうんす松はあは
 得まてしてあはま(庭)あはらあはと間れ茶をつま
 くー松の根いと清あはあはつらあ一糸の枝お声
 安らうよ庭垣あつてあはうー南は向ひはは庭あて

水梅のあはれ地なまむすむ對して萬門京山に張てあめり
湖江の潮をまきけはほよほしく直にみる便より
り此の初月の夕なまむすむに雨はさよひは名月れ
よるあひあへしまのさなまむすむに其の衆の廣し
翠のさかあふよはたはれあふはく風もはれ尾は
いよまのあふよはたはれあふはくはたはれあふはく
とあふあふよはたはれあふはくはたはれあふはく
ふ材乃類ふよたはれあふはくはたはれあふはく
僧懐ふあふ

このよの第一とくくうのあはれは橋樑の影にさよとくく
竹そのの
力とさよとあふよはたはれあふはくはたはれあふはく
守只は花はよはたはれあふはくはたはれあふはく
風雨の破れあふよはたはれあふはくはたはれあふはく

贈許六辞

本曾澄は海へ四里あはれあふはくはたはれあふはく
あふはくはたはれあふはくはたはれあふはくはたはれあふはく
あふはくはたはれあふはくはたはれあふはくはたはれあふはく
あふはくはたはれあふはくはたはれあふはくはたはれあふはく
あふはくはたはれあふはくはたはれあふはくはたはれあふはく
あふはくはたはれあふはくはたはれあふはくはたはれあふはく
あふはくはたはれあふはくはたはれあふはくはたはれあふはく
あふはくはたはれあふはくはたはれあふはくはたはれあふはく
あふはくはたはれあふはくはたはれあふはくはたはれあふはく
あふはくはたはれあふはくはたはれあふはくはたはれあふはく

養正のころのついでに、
ついでに、ついでに、ついでに、
ついでに、ついでに、ついでに、
ついでに、ついでに、ついでに、

煤抄やくいり宿りる 新

文字摺名

その都とのみれ里とや文字すれ名おとて方二間
ついでに、ついでに、ついでに、ついでに、
ついでに、ついでに、ついでに、ついでに、
ついでに、ついでに、ついでに、ついでに、

ついでに、ついでに、ついでに、ついでに、
ついでに、ついでに、ついでに、ついでに、
ついでに、ついでに、ついでに、ついでに、
ついでに、ついでに、ついでに、ついでに、

早苗ころのいりやいり 新

壺碑 在奥州市村多賀城

ついでに、ついでに、ついでに、ついでに、
ついでに、ついでに、ついでに、ついでに、
ついでに、ついでに、ついでに、ついでに、
ついでに、ついでに、ついでに、ついでに、

曠野集序

尾陽道左檀本堂主人行子集は編て名は
つしむるに何れもは名あるに
おひひたるはせむ郷曲様様なり
書ははつめくみれし其日におおし
たり日せいのちもかやうもあふ
そのうき柳橋の錦はつしむ
とほくあつし情あつして
あつし情あつして

あつし情あつして
あつし情あつして
あつし情あつして
あつし情あつして
あつし情あつして
あつし情あつして
あつし情あつして
あつし情あつして
あつし情あつして
あつし情あつして

銀河序

小津さよ行脚して
徳佐渡う海は海
三十五里

情つく増しつじりハ西施ヲ推油のんを黄金鑄
小紫上御人の園うらちめハ衣柄めきれかきまきあり
下れおめハ有るうらち親きひの娘婿結うたけいしあひ
何つよ寺の思歌舞の若流の情ともよす守自氏
うらち候名めやいして初と結うたけあんと守其
治者動と虚空は口のくは實の鼎め白ゆ結く
新う泉よ文字ばきたりふ是かあしに他れ實は何ん
何の愛ありて後れ盗人を待芭蕉洞桃を歌集して
書守

笈文序

百骸九竅れ中よ抽りめかまよ名つあて風狂坊より
誠めくすものもく海よ結しれはかんとあしよあし
うらち何とねじりて今一終よ中候のうらちあし
何の時ハ倦てね擲せんを思ひあ時よあし
人め勝むるふはちり是非胸中よはらひて是の
首にめ安うらち守るく若くあしよあし
よあめえらしむるあしよあし

是の爲に破れ給はる能はずと爲りて只此一節
 つある西行の和歌もあける。宗祇の連歌にもあは
 雪舟の法もあける。利休の茶もあける。其貫通する
 もののつあつちも同様もあはる。この造化のつ
 西時とあつちもあはる。心花のつあつちもあはる。月
 つあつちもあはる。心花のつあつちもあはる。月
 心花のつあつちもあはる。心花のつあつちもあはる。月
 造化は随ひ造化のつあつちもあはる。

卒能凡波女小町替貝

何ふに〜〜〜〜〜
 人々が〜〜〜〜〜
 まぢり〜〜〜〜〜
 又富〜〜〜〜〜
 た〜〜〜〜〜

西行上人像替貝

拵〜〜〜〜〜

さあ〜とあはれやうはるる〜
骸骨画賛

本間主馬の宅に骸骨をもて筆を執る由て能
する所を画く筆基の形を柳より画く
中におりたる人あり世ありしよしとあり人や徳禰
鶴の枕より寝る者うつをまゝに描きたるこれ
生およしめしむるのよし

稲葉やかたれあゝのすまきの穂

秋仙の賛

伴豫の小松山の風をせゆれ洞乃枯葉は吹く
其の形勢儂を吹く噫聲をくもくたの風乃音
をばあ〜と金をひくをう〜とあや〜と〜
吹く且人〜とあり〜人よ心ゆつく萬竅怒號
細音響く句毎の意味各ああり唯是天の形
自然れ仙若色蕉の破して風吹く

閑居歳

つづ物ういれ翁や日比く人のまひもまらうはく
くめもまらういれもまらういれもまらういれも
らよれれと月の夜雪乃あふのこなれれららら
らよれれと月の夜雪乃あふのこなれれららら
らよれれと月の夜雪乃あふのこなれれららら
らよれれと月の夜雪乃あふのこなれれららら
らよれれと月の夜雪乃あふのこなれれららら
らよれれと月の夜雪乃あふのこなれれららら
らよれれと月の夜雪乃あふのこなれれららら
らよれれと月の夜雪乃あふのこなれれららら
らよれれと月の夜雪乃あふのこなれれららら
酒のめしとぞ藤らねおらる雪

芭蕉文集地之部

江都

佐渡郡澤根
旭窓庵松類



小林風徳編集

常磐屋句合判

鯛のなる本れ梅咲く射ハおあそを
あそそそといとそそそ物の方くも
四時入まきそそそ雪の信りいしらそ
味の淡く水くさいれきおそそ

杉風

茅一番 左勝

茅すてり八百屋れ朝小茅ー

古

と引も小まきつらうのはいさうれ

左の茅茅の首屋の朝小柄をけりて以て茅茅も初なる待
ゆるこころすりふと野々乃原れをまにすりて子百れ松を引
流はるもまてよく流れも先八百屋のまははれまをう角の場
仍以左勝

茅二番 左

まやなうぬ千物れ来月もとふり

古

花よりそ控目うとまき乃 命を

左千物のま自も若ふまかへたまるををわらう茅と
名れれなにおもたうら身はる一徳ままに花のりも自は

茅三番 左持

茅こは翁若潭ま中入てこいひに

古

付風ゆるく吹て青酢漸く暮

碧潭ま中入て茅と翁若潭ま中入てこいひに
ゆるく吹てま青酢の漸く暮け初たるものつけりまはる
けらめりれいと若とあててをけるまじうれ流踏まれい
あまひまにまける老人ま鹿の林ますり忽然とあまひ
まけるあまひはるまはる付風とすれあまひはるまはる

うぐれ恒野先生生らるるものなりと云てらるる也

茅四番 左 持

志ほりし物ものつらうちあまふのうらや

ち

浮世やうらまき学難のちきれうら

左の句を原しき物れ教と集たるも一是新法納云
なうら茶の子さこもやうらまきうらまきうらまき
あの中より生れたるけきもたれむつうけなれあうら
ふまはりしうらまきうらまき

茅五番 左 持

春のうらみ解者うらまきのうらまきうらまき

ち

あはれたけし生まのうらまきうらまき

予り外うらまきのうらまきのうらまきうらまき
うらまきに必し生れしうらまきうらまきうらまき
あうらまきうらまきうらまきのうらまきうらまき
あうらまきうらまきうらまきのうらまきうらまき
うらまきのうらまきうらまきうらまき

茅六番 左

様あつあついづれは人の何をいふうら

古 持

千大根よめ茶をこゑおとらへる

様あつあついづれは人の何をいふうら
うらまきのうらまきうらまきのうらまき
うらまきのうらまきうらまきのうらまき
うらまきのうらまきうらまきのうらまき

りきかどかひくはれも千尺程のうきも悪もやせむと
こしてたより其身を一分割りなるともはよもあま
君を社と悪つゝめ哀なり御切ある

第七番 左

蝶のうき掌惚の洞小潜てりこ

古縁

稻浪のふ手結なり山れねあのか

いそ昔の伝承さいの洞小求たも塚り古は又結し
山れうきのたまふとせと寝たも奇なり山れさ
のあま山海種あまんとたも一里何まの編度
莫の聖につれりるあ前に彼大標を捨てたあも
あもいあつれて稲浪の大本又あつたあ

第八番 左

袖の花の香ほ小花と社いへまじり毎

古縁

考人山標を花のうきあま

花袖のうきあまあまていなる上戸の袖乃白いと
けりういれも考人のうきあま本自標れあま
見たりへなる風は傳小やさ

第九番 左

夕風うれ雨やとまきた生祿 豆

古縁

麦飯やさうは津もあおなりて

左の白雨れ夕への淋とていんとて生祿豆といはれ
舞ふるはあまあまあまはれも考人のあまあま

下目

古

天竺の持形老翁は猫のあわし福也

もくもくき五月雨のそを上忽池を舟はしとる
小徳は魚船の何ふと落と運とあはむととあるも
かり又齋の管付まこい山はそをうらなひ老
たる猫を救てみちとそとそもゆりたはるや
魚船の福もくもくはひとたはるなり

第十一番 左 後

あて世帯もれほりくもくあて只

古

影うらむや毛虫かたうしの溜る

左帯もれほりくあて淡してやまうたれりりきり

うしのなまり水にいりまき毛虫の影と初人も無なり
あまりに顔向を求めたことなるうに是れ伝るを解
身小や只帯もれやうらむとそやまうたれり

第十一番 左

古うはわあそもくうらま又根

古

影影の夏口は待たれうらま

やまに濁るまほりけあそもくふとあるうらま
うらまあわしとれを松樹ふ年巨鷹一日の業と
伝る影影の伝る無なり

第十一番 左

里草の長なり島中のた目とやんを

ち終

暮の山をうつて金輪際より自然生

里草無きそ言なり古れ山の暮自然暮が秋なり
字の月の人ひらくありま但自然石自然木自然
まてくありありあり其上五ふ字力ありて一句もつよく
まここえ侍るま言侍るる魚

第十七番 左終

茶僧月とるに梅干れ穀のこくに来り

ち

乱酒の僧見ゆるや奥一の責を受る

たのまふ字先孫をけりて現まへに梅りの情識
こすうこのれ土右根とるなる者も生教なる一や

古の句破戒れ僧をけりて東木袖一のまろ成
りけ焦熱の苦よハ袖味暖るる金うけのなる一
やとおろろく時茶教の僧をて孫孫をて信也

第十七番 左終

暮山れ雨松茸をすこくと摺り

ち

思もふ水なるけの身おこる一く

ふもなくも際暮山の雨にぬれて松茸のすこくはさる
ふもなくも際暮山の外まを味うるやれりも一終なき
ふもなくも思もふ水なるけの身おこる一く岩も水の水
ふもなくも思もふ水なるけの身おこる一く

第十八番 左終

第廿四番 左持

大根生るの道なるうたうしや人く

右

雪のみう茶屋男袂ついでまうけし

左の句はうらまのたふしむた根山や面白く雪の
中代田園三徑うらまひの辨又辨重

第廿五番 左持

雪れ竹子今を盛一とらまもの哉

右

臘月の香物ふり雪やなりとより

晋の孟宗や井中乃泣田所ハ稻生と名とあり昔ハ
又臘月の香物ハ四時五香の風をひきよきたるも昔

左ちまら

詩を漢より山魏山のまて四百餘年個人

才子又勢とあひらるる言初歌の風流代々

あつたまる俳諧多しは愛一厚くにあたり

今こゝよま物種くをりあ二十と番の句合

明で予に米きよ珠よ句くたはやう一他

何たりくるにまたり思つたまなり是を

今の風勢といふは是れ小名つけて昔

とていふを時を説く代くをほめてはるる
る一傳神田源田所たり一記をうけに
卯れまらるる、秋解ふつきて是をよとほせ風代
印を糲ふつとて、書れ中ら首荷二月れ西風
秋解の素人冬臨もゆく、唐乃が一の紅
たりも今生に戸もあてはるひ風たるもひら
枝をほらるる雨土生まあさつこのねと書物の
伝意時と傳くか、いより書本の二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

あまをさるる草代よのさるる、
うらうらく傳りたり、
こいれりも、
于時延宝八庚申季秋日

十八 橋記

い法の本なる川、
いはいなる山、
か、
甲、

へ何げくつらき心も浪もあつて佛の心も衆生に
 浮きもたれぬ心もわが心も毎夜毎夜の心
 うらもあつて身もあつて心もあつて心もあつて
 あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 もあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 おく灯の下に目をこらして涙もあつてあつてあつて
 のれさし心もあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 推すもあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

ちもあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 おのりもあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 月影の影もあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 へあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 酒もあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 ひもあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

のまはる久木氏植石をみくくかたのほらしとあはれ
かまはる浦の勢田幸徳とあはれのゆりこくしてあは
抱てこよぶあはれしゆは深き道うらみか似れはあ
清成とあはれ敷うははれはのま根と料よく青羽
石山と肩のゆりあはれしゆも木のたはれあはれ
かたし〜鏡山のあはれしゆは深き道うらみか似れはあ
うらしゆ〜あはれのゆりあはれしゆも木のたはれあはれ
あはれしゆ〜あはれのゆりあはれしゆも木のたはれあはれ
あはれしゆ〜あはれのゆりあはれしゆも木のたはれあはれ

幻住菴記

石山の奥岩間の〜りよ山神のまかふ〜りあはれ
み国を幸うるあはれしゆは深き道うらみか似れはあ
あはれしゆ〜あはれのゆりあはれしゆも木のたはれあはれ
あはれしゆ〜あはれのゆりあはれしゆも木のたはれあはれ
あはれしゆ〜あはれのゆりあはれしゆも木のたはれあはれ
あはれしゆ〜あはれのゆりあはれしゆも木のたはれあはれ
あはれしゆ〜あはれのゆりあはれしゆも木のたはれあはれ
あはれしゆ〜あはれのゆりあはれしゆも木のたはれあはれ
あはれしゆ〜あはれのゆりあはれしゆも木のたはれあはれ
あはれしゆ〜あはれのゆりあはれしゆも木のたはれあはれ

神比安しゆらの海は官道余年の地はくまひ
にひを伴い難禪室の扉中入らぬやちもたふあよ
に空あめ海や花をみ懐成りしてきつく生
海のくまひとくみしと終小に能くすまあしく
世一あましあるる樂天いみ勝の津波やち老社
海より買ら思ふの覺れひしとくもくしんれ如
棟ろくまやと思ひ捨くゆぬ

先だのむ推のよもあつ 昔もゆき

紙念記

海もきり物しあふもあまのくもくかみまはく
あまのい哀傷は津波の物れとくあまのくあ
海もあまをぬひのあまのあまのあまのあまの
海は其膚もあまの其白い海もあまのあまの
海のくまひもあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

さよ八寸面三人あ脚あゆめつららゆられ卦は
ちちもれかしく潜新牡馬の貞あゆらよ是は
あもて一月とさ人やましく用とさんや

望右銘

人の短さうしあはしう長とさうとあり
詔あまものいへん唐はじり一秋乃風

浪の五銘

茶乃靡あひとあまひく好風あひまをさく

井面せうしああひひ妙鏡かああふううてさ
う帯をさう行を刺さうさ信あのをねあねの
あまうあしあし日はあまのうくたさうは
うあくあはあかうああうう紙とあまのうあ
あさうあまのうく浪のあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまの

四十八
ぬきかたはけしき二里も形はうーあつな
今宵あはたけぬきと人小儀多し一燈りあ
はるおし一遍昭小町うあときする人ほほ
よもては二首は揮つて雨星れりあ
とめんしす

小町うあ

浩小み里も旅宿や石の上 芭蕉

遍昭うあ

セクメのうきうき一宿合羽 杉風

而古戦場文

二代の栄耀一睡の中ありく大門の跡は一里
こあつたあつた衛の跡は田野あつたく金鶴山
のこ形は跡も見え館あつたれと小上川を
南部よりあつた大はあつた衣川の泉の城とあつた
る館の下は少く大はあつた入る唐衛もく四跡は
衣の園とあつたく南部口をけりあつたひすきと

ふんふんも義臣とくわては城をこり功名
一時れ叢とある園破れて山に阿つ城を
しとるまみしとまらしとき時つる
まて海と落し侍つぬ

はるあや兵ともう夢つる跡

芭蕉文集

久集竟家

竹隠者

あつくえや芭蕉れもまきくし 祇徳
さきと油の窓の螢火 風徳
はまのまの突乃形小羅流く 立徳
酒の入津り市にふるま 風
春を待つるよふけ月の暮

かみゆくいさむ風も極爲
癒るの病をほりて肌をけ
杖御扱ふ杖をきつらけ
老より持るふと佛の禱仲間
味略する娘かこるる
指はく落し吉井村屋すて
雲にあき影は月を影
飄々と美秋の笛を吹く
風

あつひも解又裁く
手を拍てふれお場も拍りもの立
乙黒海軍に浪の潮黄
花をきき素一のつぬは舞向風
鉢をききし来るるるる
柱根は燈のいくと勢はまいて立
白乃先 軍其を先へ
楯扱ひちや漢と出るる度風

似塚よりく別海乳のこ子、
榊らは身れうきに等し二筋立
うつ了笑よりたき世影の重、
法彌を窓の菜も己のこ十手
降るきすり雨も榊を、
湖内りー丁と湯の温泉に成
園目をあう心陳幕乃際、
まき世れ松の照井よ夕月秋
風

空れとるらうく夢小も帝、
野分よハ現よ多き 離るる為立
こころいんぬ宵小塊の成人、
うきをき神と系園けうーろ楮風
考のなき聲よ 雑言 真銀、
飽たぬ花れ日較よ杖並鞋立
横木小こもきもこくも道 筆

餘興

吾伊窗

龍眼子

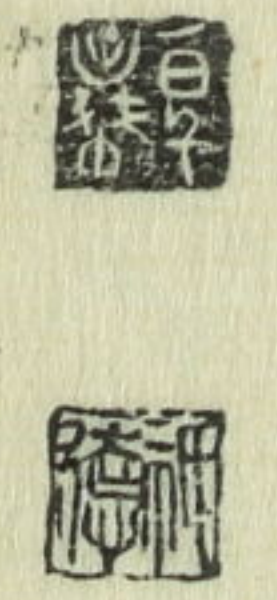
花すて小窓白ちふほとそあつて
ゆらくて一短衣なう一をきま

蘆曉子

こまきおはり花よ渡してさう一物

こまきおはり花よ渡してさう一物
徳をもし一花よ渡してさう一物
こまきおはり花よ渡してさう一物
月よ花よ渡してさう一物
龍山屈の主人世道ふらふら
くゆく信し一考父一松一の
遊一の一身一を一え一録一の一芳一が一人一の一法一

一 辭をくふとなくままめりわ
 とめく書中の常々ある味くふ事の
 系せも乃とる一 西士の枝折をせ
 としう信もつけくろくえん少神の
 上の上の
 一帖をせりてくしみうふ
 一 一しうき多き目左に後日
 決意



書肆

- 江戸十軒店 西村宗七
- 江戸淺草寺町和泉屋庄次郎
- 大坂高麗橋 藤屋弥兵衛

27年
 0700
 m+12

翫風亭